森林レンジャーがゆく

「丘陵の新しい森づくり」

（74）

今、菅生の丘陵地（市有林）でボランティアの方と一緒にオオムラサキの舞う森づくりに取り組んでいます。この森は、戦後の拡大造林でスギ・ヒノキ林が広がっていますが、かつては薪山や茅場として利用されていたと考えられます。ここでの森づくりは、かつての森の様子を取り戻すことではなく、多様性を念頭に「オオムラサキの舞う森で子どもたちが走り回る景観」を目指しています。これは、大変難しいお題で、ただ広葉樹林を造林し、保護保全に努めるのではなく、人が関わる森が大前提になっています。

作業は、ヒノキ林をパッチ状に伐採し、そこにエノキなどを植栽する計画ですが、林縁部にはマダケが生育しており、マダケの伐採と片付けをしつつ、ヒノキの伐採、玉切りなどを進めています。幸いにも、チェーンソーを使い、安全に伐採できるボランティアの方が育ってきており、広葉樹の植栽スペースを作る「空開け」は順調に進んでいます。植栽は、今年の秋以降の予定で、その後は森を育てる作業が始まります。植栽された木々が枝葉を広げ大きな緑陰を作るまでに何年かかるか？先の長い話です。今、作業に参加している子どもたちが成人し親となり、子どもを連れてくるころ、ようやく予定していた森の姿が見えてくると思っています。森づくりは人が創造することのできる自然ですが、土木工事と違い、短期間で完成させることができません。次世代に引き継ぐことができる森づくりが大切だと考えています。

一方で、放置された森はたくさんの野生動物の天下になり、農業被害を拡大させている要因といわれています。田畑や里地に野生動物を侵入させない方法として、バッファーゾーン（緩衝帯）を作ることが全国で推奨されています。林縁部の木を切り、開けた空間を作ることで、野生動物を警戒させて田畑への侵入を阻止するという考え方です。オオムラサキの森のような、人が管理して利用する「人が関わる森」が野生動物を人から遠ざけるバッファーゾーンになることも期待しています。

（杉野）